

第5章 まとめ

第1節 佐味今田谷内古墳群の調査成果

国史跡となった万行遺跡で発見された大型建物群（古墳時代はじめ）の造営者の究明が一つの課題であった。その奥津城として佐味今田谷内古墳群が候補のひとつとして注目されていた。折しも、古墳群が所在する土地の所有者が古墳群の保存と周辺環境の維持、地域の歴史の啓蒙を目的とした保存会を立ち上げ、調査及び保存へのご協力があったため、市教委として万行遺跡との関連性、七尾地域における古墳の移り変わりを解明するために保存を目的とした確認調査を実施した。その調査成果を記す。

1号墳（前方後円墳）

全長（推定）29m、後円部径（推定）18.4m、後円部高（推定）2.4m（東端）：3m（南端）、前方部長（推定）10.6m、前方部高1m（北端）、前方部幅（推定）10mで後円部、前方部とも全体的に削平を受けている。後円部墳頂は、盗掘を受けており、正確な埋葬施設の構造は不明だが、周辺に海石（石灰質細粒砂岩）や板石（安山岩：須曽石）が散在するため、石材を使用した埋葬施設の可能性が考えられた。T1・2の調査で後円部の下半部は地山を削り出し、旧表土面より上は盛土工法で築造していることが分かった。ただし、詳細な築造過程は不明。北・西側は谷地形を利用して墳丘を大きく見せる意図がうかがえた。埴輪・葺石なし。段築は確認できない。T2の後円部墳頂の攪乱土である②層からガラス玉1点(50)と鉄刀の茎1点(48)、④層から長頸鎌4点(49)が出土した。ガラス玉は、蛍光X線定性分析により、基礎ガラス材質はソーダ石灰ガラスでコバルトによるイオン着色であると推定された。鉄刀の茎は、X線透過撮影により木質の柄に有機質の紐が巻きつけられていることが確認できた好例であった。長頸片刃箭式の鉄鎌は、錆着により判断が難儀であったが、形状から6世紀前半から中頃に推定された。前方部からくびれ部西にかけて、須恵器（台付壺、甕、高杯又は装飾器台？）の破片が集中して出土しており、矢田高木森古墳のような墓前祭祀を執り行っていた可能性が考えられる。出土遺物から6世紀前半から中頃の築造と推定できる。

2号墳（円墳）

直径30m（推定）、墳丘高6.4m（南端：標高21m）を測る円墳。現状は南北に長く、墳丘の東・西側は削平されている。現況で墳頂部は径約9mの平坦面になっており、保存状況は良好ですが、埋葬施設の構造は不明。標高約21m辺りで平坦面を作りだし、墳丘の中腹にある旧表土面から下を地山削り出し、上を盛土で築造していると推定できる。1号墳と2号墳の間で確認された溝（幅6m、深さ0.8m）は、T5・6の旧地形の状況からも2号墳に付属する周溝の可能性が高い。地形の状況から西側のみに存在すると思われる。時期を特定する遺物は出土していない。埴輪・葺石、段築はない。

3号墳（円墳）

1号墳から20m南側の尾根先端部にある小型円墳。東西が直線的なため、方墳にも見えたが円墳として判断した。復元径約11m、高さは1m（標高20mライン）。出土遺物はない。4号墳は未調査。

まとめ

佐味今田谷内古墳群の西には、七尾鹿島地域の中期後半から後期を代表する「矢田古墳群」が存在し、6世紀初頭の盟主墳である矢田高木森古墳（前方後円墳、全長58m）や先行して矢田丸山古墳（円